

『蘇東波と呉道子』 (色染 35 年卒 山田英二)

§ 1. 蘇東波とは (号は東波居士、1037~1101 年) :

蘇東波は水滸伝の舞台となっている北宋時代(960~1127 年)の最高の詩人であり、書画家であった。1085 年登州軍、州事 (州の長官) となり、在任期間は 5 日間であったが、蓬萊市の蓬萊閣 (城郭) に碑文を残した。その碑文が、蓬萊市の海岸に聳える蓬萊閣の中にある大きな岩に刻み込まれているが、蓬萊市の蓬萊華茂精細化工有限公司へ染料製造技術の技術指導に訪問した際、その石碑の拓本(2m×1m)をお土産に頂戴した。蓬萊市、対日招商部、呉志剛部長に、昔その碑文を翻訳して頂いたものがあつたので、若干手を加えて日本語らしく修正した翻訳文を § 2. に転記しました。原文は約 1000 年前の文章なので難解な漢文で書かれている様です。

§ 2. 蘇東波の碑文の現代語訳 :

東波居士が史全叔に対して下記の様に告げた。知恵ある者が物事を創作し、才能ある者がそれを評価、発展させる。ただ一人の力で一方的に優れた物事が完成できるわけではない。【註】創造力を備えた人と、評価発展能力を備えた人によって優れた作品が生み出されるという意味と考えられるが、現代の科学技術に通じるものがある。例えば、ノーベル賞を受賞する様な創造力豊かな本庶教授の様な人が免疫阻害物質 PD-1 を発見し、その発見を核として、評価発展能力を備えた人々が癌の免疫療法剤を開発・実用化する等である)。

長年にわたって文化人が学問を研究し、芸術家が芸術を研究してきた結果、夏・殷・周の三代に始まり、漢代を経て、更に唐の時代に至って、それらの成果は既に完成レベルに達している。

詩について言えば杜甫に至り、文章は韓愈に至り、書道なら顔真卿に至り、絵画であれば呉道子に至り、古代からの変遷は改変の余地が無いほど完成の域に達している。

これらの人々の作品は古今東西の最高レベルに到達していると言えるであろう。

特に呉道子の描いた人物像は燈火で照らした影とそっくりである (【註】現在の写真とそっくりという意味)。呉道子の筆使いは、逆順、側面、縦横、平直な筆使いが互いに適度に調和している。古代から現代にかけて、呉道子だけにしか見られない独特の境地 (精妙な理論を豪放に表現) に達している。他の人が描いた絵は直ぐには誰の描いた絵か判断できないが、呉道子の描いた絵は一目見れば本物か偽物か直ぐわかる。しかし、世の中にあるものは偽物が多く、本物は稀有である。

呉道子は世の中で画聖と称えられている。呉道子の画風には独特な特徴があり、洒脱な豪放さ、伝統に捉われず自由闊達、優雅と世俗が共に楽しめる画風となっている。

本当に見応えがあつて、力強く、余裕もあつて素晴らしい絵である。

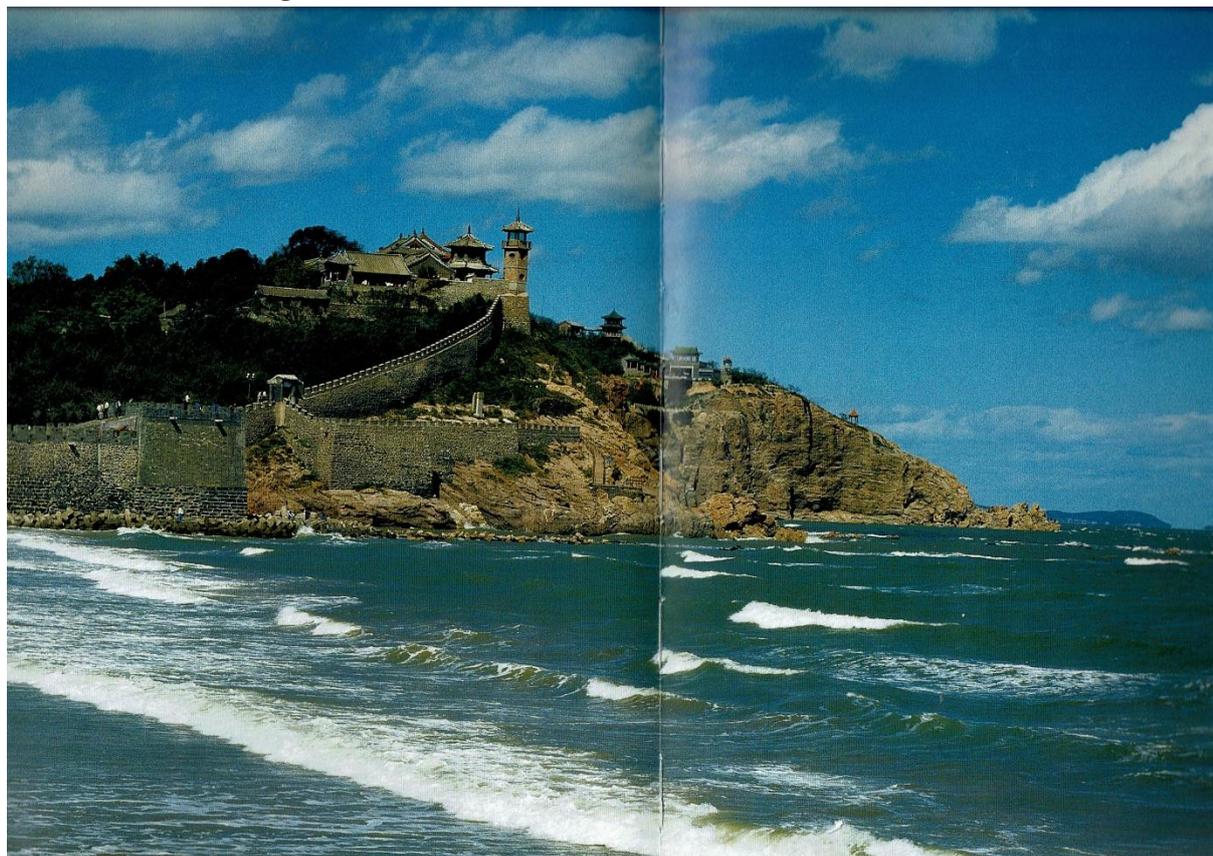
元豊 8 年 (1078 年) 11 月 7 日

§ 3. 呉道子について :

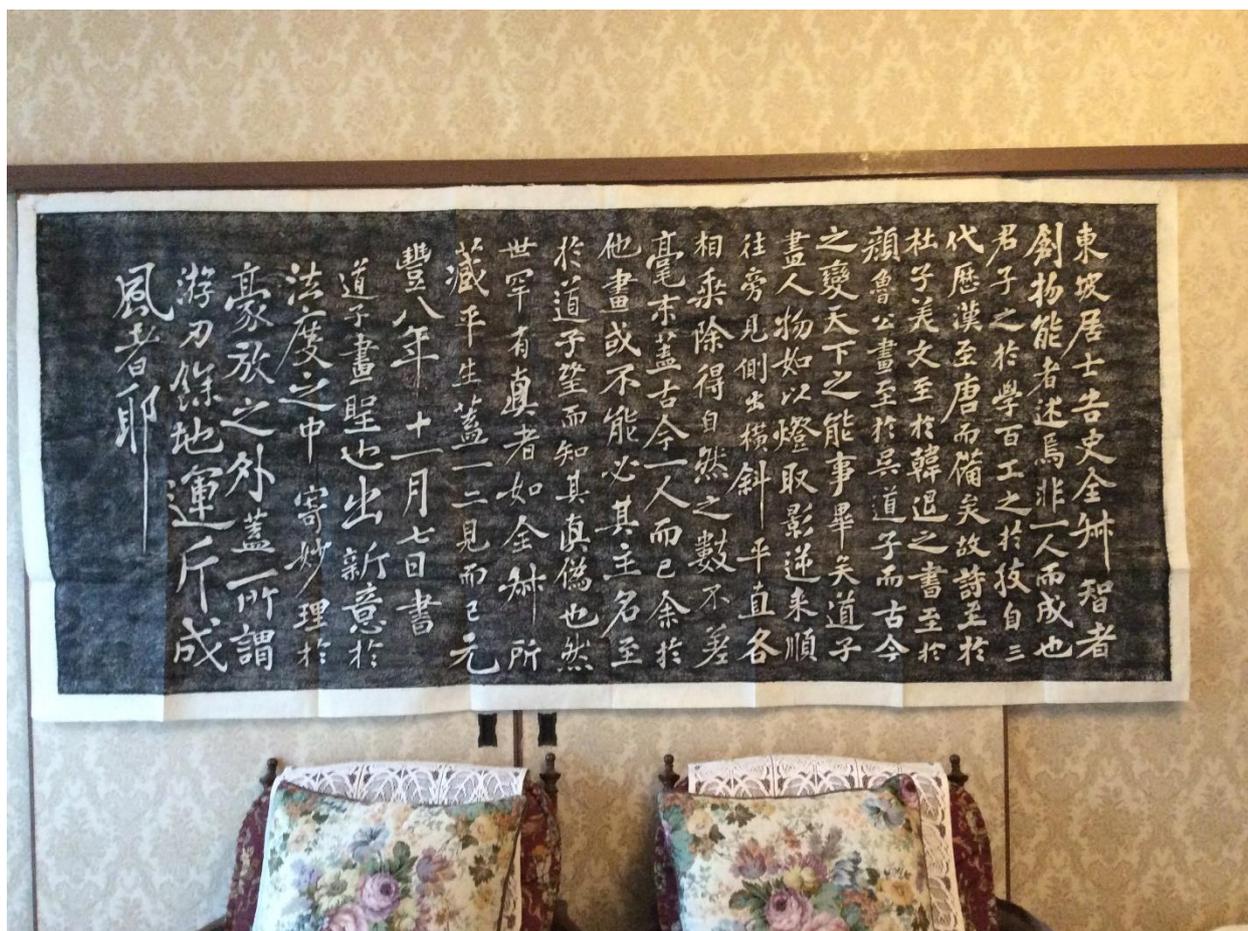
蘇東波が絶賛した呉道子は、8 世紀前半に活躍、唐代玄宗朝に仕えた画家で、人物画、山水画、仏画等、あらゆる領域で唐代第 1 の画聖と呼ばれた。仏寺に描かれた壁画は 300 を超え、後世からも高く評価され、中国、日本の画家に多大の影響を与えたという。

(A) 蓬萊閣の写真、(B) 蘇東波の石碑の拓本、並びに (C) 呉道子が制作した絵画の一部、を以降に添付致します。

(A) 蓬莱閣 (Zhang Jianhua 氏撮影「人間蓬莱」より)



(B) 蘇東波の石碑の拓本



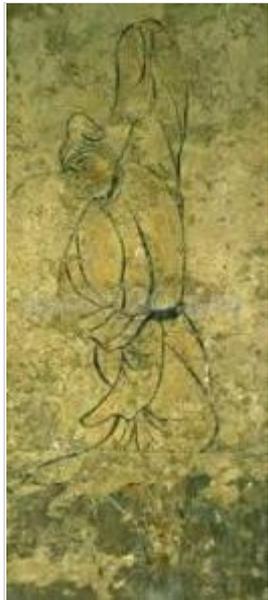
(C) 吳道子が制作した絵画

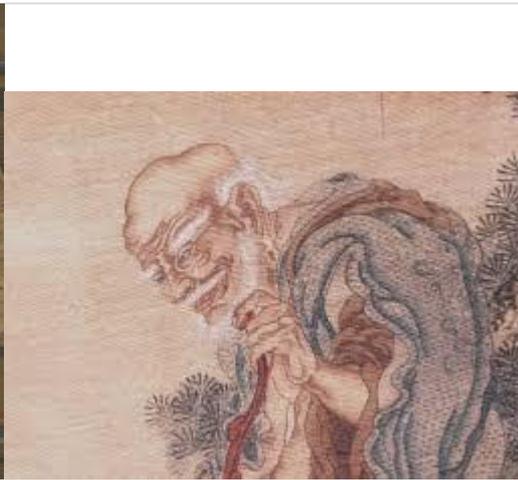






Fig. 127. The last picture of Wu Daozi. From a drawing by Tachibana Morikazu.





(平成30年10月)